

日隆における日本天台史観の一考察

——五大院安然作『真言宗教時義』を中心として——

米澤 晋之助

一 問題の所在

慶林坊日隆（一三八五—一四六四）の著述は、法華經本門八品を主軸とし、日蓮（一二三三—一二八二）遺文を面、天台三大部本末を裏として天台教学と日蓮教学との相違を明確にしようとしたことが知られる。このような教学思想が主張される根底には、日隆が摂取した日本天台教学の要素があり、修学した軌跡を見逃せない。

実際日隆の著述を紐解くと、天台宗諸師の著述引用が多数なされていることに気づく。そこで本稿では、天台宗の学僧で天台密教の教理体系を完成させ、その後の中古天台教学の一大要素たる本覚思想の基盤を用意した五大院安然（八四一—九〇三、以下安然）の天台義をどのように捉え、日蓮義との相違を明確にしようとしていたのかを確認したい。⁽¹⁾

そのための研究方法としては、日隆が引用する安然の文でも特に日隆の引用回数の多い『真言宗教時義』（『真言宗教時

問答』、以下『教時義』）について概観し、日隆がどのように引用しているのかを検討していくこととする。

二 日隆の引用する『真言宗教時義』

日隆の引用した『教時義』とは、『教時問答』とも呼ばれ、内容は四一・十門の構成からなり、天台密教の教判を理論的に体系づけた重要書である。また、真言教義を論じた同じ安然の『教時諍論』とも密接な関係にあり、この両書によって東密と相對する台密教判が確立されたと言われている。⁽²⁾

日隆の著述にはこの『教時義』の引用が多数なされており、管見の限り、八種類計六四箇所の引用文が確認でき、これらを列举すると以下のようなになる。

①十界之中其菩薩界常修常証無始無終。故有「報身常滿常顯」無始無終。⁽³⁾

②衆生迷故成「多衆生」。諸仏覺故成「一仏」。⁽⁴⁾

③若約「一心一心識義」則亦一心一真如此法。中都無「煩惱菩提生死

涅槃凡夫諸仏。故作^二是説^一本無^二成仏及不成仏^五。

④天台本迹釈与^二今宗因分久近^一意同。故大日疏云。此經本地之身即是妙法蓮華最深秘密處。觀心釈与^二今宗果分一体^一意同。故大日疏云。釈尊久遠寿命皆在^二衆生一念心中^六。

⑤一代八千機見不同^七。

⑥而法華中阿闍弥陀本是他仏。非^二釈迦身^一。又普賢文殊觀音弥勒亦是他人。非^二釈迦身^一。今真言宗云^二皆是一仏一身^一。若法華説是真實言説可^レ權。若真言説是實者法華説可^レ權。何云^レ同耶。答。法華經約^二一切一心識^一故云^二阿闍弥陀^一。是他仏身。又普賢等是非^二釈迦身^一。今真言宗約^二一心一心識^一故云^二四方四仏四維四菩薩皆大日身^一。然天台云^二心仏及衆生是三無差別^一只心是一切法。只一切法是心。非^レ縱非^レ横。非^レ一非^レ異。芥爾一心必具^中三千^上。即是今真言宗一心一心識意^八。

⑦法華明^二久遠成仏^一。此經明^二頓証成仏^一説雖^レ異實是一仏^九。

⑧華嚴般若維摩法華涅槃等唯理秘密。大日金剛頂等事理俱密^{一〇}。

これらの『教時義』の引用文について日隆は、①三四箇所、②五箇所、③一箇所、④一九箇所、⑤二箇所、⑥二箇所、⑦一箇所、⑧一箇所の引用をほどこしていることが確認できる。そこで、引用が特に多い①④について、実際に日隆がどのように引用しているのかを見ていきたい。

三 『真言宗教時義』の引用

日隆が引用する安然の文について概観すると、①の引用が最も多く、確認すると以下の記述が見られる。なお、安然の

日隆における日本天台史観の一考察(米澤)

引用と思われる箇所については太字傍線を施している。

尋云、御抄ノ中ニ以^二上行菩薩^一為^二本因妙^一事有^レ之其相如何。

答、觀心本尊抄ニ被^レ遊^レ之也。本門ノ意ハ因果本有^{ニシテ}釈尊地涌ハ同体ノ師弟^{ニシテ}一身因果也。釈^ニ其菩薩界常修常証無始無終。報仏如来常滿常顯無始無終^一以上。其菩薩界^ト者本有地涌也。報仏^ト者本果

釈尊也。此師弟同体常恒^{ニシテ}無始無終也^ト云処ハ本因妙菩薩界即地涌也^ト聞タリ。本因妙^ヲ釈尊^ト云方ハ在世正説之聞也。本因妙^ヲ地涌^ト云方ハ十界久遠ノ下種ノ辺也。是流通ノ意也。所詮釈尊上行同体^{ニシテ}一切衆生最初下種ノ時ハ顯^ニ本因上行^一、得脱ノ時ハ顯^ニ本果釈尊^一也、此下種得脱ノ衆生ハ此娑婆世界ニ可^レ限也。余界^ヲハ以^二分身迹化等^一利^レ之^{以上}。

ここでは『五帖抄』の文を挙げ、日蓮遺文の中に上行菩薩をもつて本因妙となす事はあるのかという問いを設け、答えとして『觀心本尊抄』において述べられているとし、因果は本有として釈尊と上行は同体の師弟で、一身の因果であるとし、安然の文を引用している。ここで注目できることは、引用する際、「釈に」とあり、「安然云く」とは明示されていない。日隆は安然や他の諸師の引用文を転用し内鑑本密の意を以て使用する際、名前を伏せて引用していることが窺える。次に、引用の多い④について見ていくこととする。

二、本迹釈と觀心釈と勝劣の事

天台宗の義に云く、觀心釈は勝れ本迹釈は劣る、なり所以に五大院先徳の教時義に久遠に於て因分果分を立つ因分の久遠とは本門

寿命品に説く処の五百墨点の塵数はれなり果分の久遠とは釈迦久遠の寿命皆在衆生一念心中等と云へる是れなり、此の因果久遠の中には因分の久遠と云ふは四種釈の中の第三の本迹釈の重なり此の本門と云ふは顯說法華の分齊迂廻道の正機色心転入の迹本なり下劣なり、⁽¹²⁾

日隆は、本迹釈と観心釈において勝劣の事と題し、天台宗の義として観心釈は勝れ本迹釈は劣るとし、その証文として安然の『教時義』を引用し、久遠に因分・果分を立て、因分久遠は五百億塵点劫を指し、果分久遠は釈尊の久遠の寿命はみな衆生の一念心中にあるとする。この因分久遠は、『法華文句』の四種釈（因縁釈・約教釈・本迹釈・観心釈）の中でも本迹釈の重であり、本門とは顯說法華であるとする事で劣とみなしている。この安然の引用は先程の文とは明らかに違いが見られ、台密に対する批判を行う場合、安然という名と『教時義』という著述名まで明らかにして批判を行っていることが窺える。この引用方法について日隆は、

当宗としては、談義法談の時、言を顯にして覺大師已來の人師の釈を引くべからず、唯、或る大師或る人師、或る先徳と引くべし、其の所造の抄名をも云ふべからず、但し呵責の時其の人其の抄をも引くべきなり、余の経論を引く意之に准ずと知るべし⁽¹³⁾云と述べていることから、天台宗諸師の文を引用する際、二つの事柄をもつて意図的に引用していると言える。⁽¹⁴⁾

四 おわりに

以上、日隆著述にみる安然の『教時義』引用文を中心に概観することによって、二つの事柄が指摘できる。

第一は、日隆が安然や天台宗諸師の文を引用し、それらの教義を日蓮義を通して解釈する場合、その典拠となった著者名や著述名についてあえて表示しないことである。これは、当時日蓮門下の僧侶が、比叡山や天台宗の談義所で学ぶ者が多数いることと関わりがあったのではないだろうか。なぜなら①の文は、行学院日朝（一四二一—一五〇〇）や、菩提心院日覚（一四八六—一五五〇）等の著述において散見されること⁽¹⁵⁾から、当時、日蓮門下諸師が天台教学を学ぶ上で一般的な文であったと思われる。よって内鑑本密の意を以て安然の文を引用することで、天台宗の影響を受けた日蓮門下諸師に自身の教学を理解させようと考えたのではないかと推察される。さらに日隆は、談義、法談、公場対決においては、「ある大師」等と引くことを促すことから、引用には細心の注意が払われていることが窺える。

第二は、台密や日隆在世当時の天台宗に対する批判を行う場合、著者名や著述名を明らかにして批判していることが確認できる。これは、具体的に著者名や著述名をあえて表示して批判を展開することで、日蓮義と天台義との相違をより鮮

明にすることを目的としたのではないかと考えられる。

このように考えると、日隆の著述を読み解く際、主にこの二つの事柄から理解を示す必要があると思量される。なぜなら日隆の著述には、日蓮教学の重要法門と並列して天台典籍の引用がなされる場面もあり、そのため、短絡的に日隆が日本天台諸師の教学思想を受容していると解釈される危険性も孕んでいるからである。よって、この二つの事柄は日隆教学を理解する上で重要な点であると考ええる。

1 なお、日隆の円珍批判については、拙稿「日隆の塵点劫解釈についての一考察——智証大師円珍批判を中心として」（『日蓮教学研究所紀要』第四〇号、二〇一三年）において少しく考察してきた。

2 『仏書解説大辞典』（大東出版社、一九三三—一九三五年）二卷二八二頁以下。

3 『正蔵』七五卷三七六頁c。引用箇所は以下の通りである。また、同頁に複数引用が見られる場合、重複して記載している。なお検索には興風談所編『統合システム』二〇一四年度版を使用した。『法華宗本門弘経抄』（御聖教刊行会、一九二五—一九三四年初版、日蓮聖人御降誕奉讃会、一九七〇—一九七一年再版、以下『隆全』四卷五一六頁、八卷六九、八五、二一八、二六八、二七六、五四八、六〇三頁、九卷六五五頁、一一卷一八三頁）。『日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞』（本門仏立宗々立仏立教学院、一九六三年）四六九頁。『五帖抄』（『仏立宗義書』本門仏立宗務本庁、一九五八年）三卷八三頁。『私新抄』『十三問答抄』（『日蓮宗宗学全書』山喜房仏書林、一九六一年、以下『宗全』八卷一二三、三五七、四〇七

頁。『開迹顯本宗要集』（『日隆聖人御聖教』日隆聖人御聖教刊行会、一九五五—一九八二年、以下『隆聖』一卷一一五、一一九、二三八頁以下、二卷九、一三、四五、六三、九九、一〇三、一〇六、一一一、一三三頁、三卷一九〇頁、四卷八二、八三、八六、八七、一七八、四三三頁。4 『正蔵』七五卷三七七頁a。『隆聖』一卷三六八、三九四頁、五卷八二、八七、九六頁。5 『正蔵』七五卷三七八頁b以下。『隆聖』三卷七七頁。6 『正蔵』七五卷三八四頁b。『隆全』一卷六四三、六四三頁以下、六四四、六四四、六六五頁、一〇卷三一頁。『四帖抄』（『法華宗全書』東方出版、一九九九年）一一三、一一五、一一六、一一六頁以下。『仏立宗義書』三卷一八三頁。『隆聖』一卷三六八、四二五頁、三卷一七〇、一七一、一七一、一七二、一七三頁、五卷二二四頁。7 『正蔵』七五卷三八四頁c。『隆全』八卷五一八頁。『隆聖』三卷一五九頁。8 『正蔵』七五卷三八九頁c。『隆聖』三卷三五、七六頁以下。9 『正蔵』七五卷四〇三頁c。『宗全』八卷二三四頁。10 『正蔵』七五卷四一四頁c。『隆全』九卷三七二頁。11 『仏立宗義書』三卷八三頁。12 『隆全』一卷六四三頁以下。13 『隆全』六卷一二二頁。14 同様の内容が『隆全』五卷三〇〇頁、八卷四八〇頁等にも見られる。15 『宗全』一五卷二六二頁、『法華宗全書』（法華宗（陣門流）宗務院、一九八〇年）一卷一七四頁等多数引用が見られる。

〈キーワード〉 日蓮、日隆、安然、『教時問答』、台密

（立正大学大学院研究生）